

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K03028

研究課題名（和文）非英語圏大学EMI（英語を媒介とする授業）プログラム実態調査と言語政策への提言

研究課題名（英文）Survey on EMI (English-Medium Instruction) Programs in Non-English-Speaking Countries and Recommendations for Language Policies

研究代表者

飯野 公一（Iino, Masakazu）

早稲田大学・国際学院・教授

研究者番号：50296399

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：アジア非英語圏で増加しつつあるEMI(English Medium Instruction)プログラムにおいて日本人学生と外国人学生の英語、およびその他言語使用やコミュニケーション活動の実態、またEMIプログラム卒業生等が仕事で求められている言語使用について、本研究を通じてより詳細なデータを収集、分析することができ、言語教育への政策提言の素地となった。研究期間全体を通じて、これまで十分な議論が見られなかったEMIのE（English）および他言語の使用実態および認識について、よりlingua franca, translanguage practiceとしての視点の重要性が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アジア非英語圏の大学においてEMIプログラムが大学の国際化を進展させる一方で、多くの大学が様々な課題に直面している。EMIが高等教育で果たす役割とは何か、グローバル人材教育とは何か、英語とは何か、といった問いが常に突き付けられている。学生、保護者、教職員、政策立案者、企業経営者等多様な利害関係者が影響を与え合い、それぞれ国・地域の歴史を通じて経験してきた英語との向き合い方（言語イデオロギー）と照らし合わせて、それぞれの答えを模索している状況である。英語がグローバルな市場参加のために必要であるとされる一方で、その他言語の地位、および自己の言語、文化アイデンティティが脅かされる事象も観察される。

研究成果の概要（英文）：Regarding EMI (English Medium Instruction) programs in non-English-speaking Asian countries (including Japan) the study collected and analyzed more detailed data on the usage of English and other languages, as well as communication activities among Japanese and international students, and the language skills required in their professional careers. This study serves as a foundation for policy recommendations in language education. Throughout the entire research period, the importance of adopting perspectives such as lingua franca and translanguage practices has been confirmed in understanding the usage and perception of English and other languages within EMI programs, which have not been sufficiently discussed in the past.

研究分野：社会言語学

キーワード：EMI ELF 英語 非英語圏 言語政策 言語教育 大学教育 社会言語学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

英語を第一言語としない国・地域の大学において、EMI(English-medium Instruction)が急速に広がりをみせている。1980年代後半に始まったエラスムス計画はEU域内の学生、教員の人物交流を目的とするが、その後ソクラテス計画、エラスムス・ムンドス計画等へと地球規模で発展してきた。また、1999年のボローニャ宣言を経て、高等教育の域内連携はさらに強化されることになったが、そこでは多言語を背景とする参加国の共通言語として英語の役割が高まるとともにEMIが拡大する結果となった。また、アジア諸国では、シンガポール、香港、マレーシア、ブルネイ等旧英国植民地の高等教育ではEMIが実施されてきたが、最近では、中国、韓国、タイ、台湾、といった国・地域でもEMIが導入されるケースが増加してきている(Iino, 2010, Kirkpatrick, 2012)。日本も例外ではなく、グローバル30やスーパーグローバル大学創世支援といった一連の大学国際化プロジェクトの後押しもあり、2008年に英語による授業を実施している大学数(学部レベル)は190校(26.3%)を数え、2012年には241校(32.4%)へと増加し、また、英語による授業のみで卒業できる大学数(学部レベル)は同時期の比較で7校(1.0%)から20校(2.7%)へと増加している(文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室「大学における教育内容の改革状況について(概要)」, 2014)。後者の「英語のみで卒業できる学部」をEMIプログラムと呼ぶことが多いが、数は少ないものの今後さらに増える動きが見られる。

EMIとはDearden(2014)の定義によれば、“the use of the English language to teach academic subjects in countries or jurisdictions where the first language (L1) of the majority of the population is not English”(人口の大半の第一言語が英語ではない国・地域で専門科目を英語で教えること)とされる。近似概念としてのCLIL(Content and Language Integrated Learning、内容と言語の統一学習)は言語学習も目的とされるが、研究者によっては現実的な区別は難しいとされる場合もある。明治期日本の近代国家建設期の大学での英語使用、ポストコロナ状況でのアジアでの英語使用といったコンテクストと異なり、最近20年近くの大陸ヨーロッパ、アジア圏におけるEMIの拡大現象は言語史上大きな変化の現れとして捉えることができる。このように、1990年代以降グローバル化の進展を背景とした「英語化」は大学教育へ大きな影響を与えている。

しかしながら、非英語圏でのEMIプログラムにおける実態調査は欧州のコンテクストでは開始されているが(Cots, Llurda and Garrett 2014, Dafouz and Smit 2014, Doiz et al. 2011, 2013, Jenkins 2014, Mauranen 2012, Smit 2010, Smit and Dafouz 2012 など)、アジア圏はまだまだ始まったばかりである(D' Angelo 2015, Hino 2015, Hu and McKay 2012, Iino 2012, Iino and Murata 2016, Wang 2015 など)。とくに最近の研究では、EMIの「E」に注目し、これまでネイティブ規範の英語を前提としてきた政策と、現実の英語使用および多言語使用の実態をELF(English as a Lingua Franca)の視点から分析し、そのギャップを明らかにしようとする動きが見られるようになった(Murata and Iino 2017, Murata, Iino and Konakahara 2016 など)。

筆者が本研究の着想に至った経緯は、勤務校において、学部、大学院レベルでEMIプログラムの立案に関わり、教員としてのみならず、現代GP(平成16年度)「英語がつなぐグローバルキャンパスへの取組」、また教育GP(平成20年度)「多文化・多言語社会に向けての教養教育」の運営を担当してきたことにある。その後、早稲田大学留学センター所長として、グローバル人材育成推進事業(グローバル・リーダーシップ・プログラム<平成23年>、WINGS<Type A,平成24年度>)、大学世界展開力強化事業(AIMS<平成25年度>)に取組み、日本で最大数の留学生の送り出し、受け入れを実現してきた。これまで、基盤研究(c)「社会言語学的环境の異なる留学体験が言語習得・言語態度に及ぼす影響に関する調査」(平成21年度採択)「非英語圏英語プログラムへの留学体験が言語習得・国際理解へ及ぼす影響に関する調査」(平成25年度採択)にて非英語圏EMIプログラムを中心にデータを収集し、分析を行ってきたが、本研究では日本におけるEMIプログラム受入外国人学生の言語使用と、卒業生への調査を含めることによって、これまでの研究成果を深化させることを目指した。

非英語圏のEMIに関する研究は、前述のとおり、これまでEMI先進地域のヨーロッパを中心に行われてきたが、アジア圏、とくに本研究の対象とするタイ、台湾、日本においてはまだまだ始まったばかりである(Iino & Murata 2016)。アジア圏でのコーパスを基にした研究(Kirkpatrick 2010)と異なり、本研究では、エスノグラフィックな社会言語学的調査方法を用いて、実際の教室内外での録音、録画、インタビュー、アンケート調査を行い、質的データを収集し、分析する。このような多面的かつ詳細な分析によって、マクロレベルでのEMI推進政策とミクロレベルでの実際の参加者の経験とを対比したものはこれまでなかった。また言語使用の実態を、英語のみにフォーカスすることなく、多様な言語資源やマルチモダールな視点から多層的に捉えることを試みた。本研究を通じて得られる知見は、今後も拡大傾向にあるEMIプログラムのより効果的な政策立案・運営、カリキュラムデザイン、教職員へのFD等を通じた研修機会の提供、学生へのより適切な指導、広く社会一般への情報提供等へ貢献するものと考えられる。また、非英語圏で英語を第一言語としない参加者間のコミュニケーション活動を分析することで、関連する英語教育、ELF、国際教育、言語政策、社会言語学等研究分野への貢献にもつなが

ると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究目的は、アジア非英語圏（日本を含む）で増加しつつある EMI(English Medium Instruction、英語を媒介とする授業)に焦点をあて、(1)日本人学生と外国人学生の英語および現地語の言語習得やコミュニケーション活動の実態を把握し、また(2)EMI プログラム卒業生への調査を実施することによって、仕事で求められている言語使用とカリキュラムとの関連を分析し、言語教育への政策提言を行うことである。グローバル30やスーパーグローバル大学創成支援といった高等教育の国際化政策のなかで、EMI は留学生数を拡大し、英語教育の効果も期待されるとされ推進されてきたが、実際に参加者がどのような体験をし、プログラム終了後にどのようにその経験を活かしているかについての研究は未だなく、政策評価としても重要な課題である。

## 3. 研究の方法

本研究では、対象は非英語アジア圏のうち、タイ(チュラロンコーン大学、タマサート大学)と台湾(国立台湾大学、国立新竹教育大学)および日本(スーパーグローバル大学創成支援採択校6大学)のEMI プログラムについて、制度や政策の比較を行うとともに、そこに留学している日本人、外国人学生の言語習得やコミュニケーション活動についてのエスノグラフィックな調査を実施した。とくに、それぞれのEMI プログラムにおいて、入学時英語能力の評価基準、卒業時の目標基準、教員採用の要件、プログラム内容、シラバス、教材のデータ収集を行い、教室内での観察、音声記録、ビデオ録画等を通じたデータ収集、学生、教員、卒業生(およそ卒業後10年以内)を対象としたアンケート調査およびインタビュー調査等を通じて、アジアの大学で拡大するEMIの実態を調査した。さらに、学生に参与観察者として自らの教室外(寮、ボランティア、サークル、消費行動等)でのコミュニケーション活動を記録させるなどして、マルチリンガル、マルチモダール(multimodal、言語のみならず図、音、IT等様々な手法を用いてコミュニケーションを図る状況、cf. Shohamy 2006)な実際の言語使用を調査した。こうしたデータをもとに、非英語圏EMI プログラムのEが意味するEnglishとはいかなる特徴を持つか、現地語の使用状況、多様な言語、文化を背景に持つ留学生との接触場面状況、参加者の言語意識・態度、また、新しい情報テクノロジーの活用状況等を分析した。この間、Voravudhi, Chirasombutti, Associate Professor, Chulalongkorn University(社会言語学分野での共同授業、共同研究、現地調査の協力、タイの言語政策情報の提供)、Yanagisawa, Shizuku(共同授業、共同研究、現地調査の協力、タイ日本語教育分野情報提供)、Fu, Bennett Yu-Hsiang, Professor, National Taiwan University(同大学の国際交流の責任者、現地調査の協力、台湾のEMI政策に関する情報提供)、Luo, Wen-Hsing, Associate Professor, National Hsinchu University of Education(ELF研究で共同研究、現地調査、ELFに関する情報提供)、Cynthia Tsui(Assistant Professor, National Chengchi University, 台湾言語政策についての情報提供、学会共同発表)、国内共同研究者:村田久美子・早稲田大学教授(EMI, ELF、アンケート、インタビュー調査、科研共同研究、共著、共同学会発表等)、Yuko Goto Butler(共同研究、共同論文執筆等)の協力を得ることによって本研究は実施された。

海外協力大学において、EMI プログラム(課程の一部が英語で実施されるEMI コースの場合も含む)の授業を参与観察したほか、日本人留学生、現地学生を対象者としてインタビュー調査等質的調査を実施した。参加者のキャリア選択にEMIがどのように影響を与えるかにも注目してインタビューを行ったほか、当該EMI プログラム卒業生(主に筆者の学部ゼミ、大学院研究指導対象の卒業生および過去のフォーカスグループ参加学生等)にインタビューを実施した。この間、様々な大学国際化プロジェクト、EMI 推進策等に関する政策ドキュメント、中間報告、評価委員会コメント等を収集し内容分析も行った。なお、調査期間中にコロナ感染の拡大により、海外渡航、国内移動、および対面での調査が行えない事態が生じ、インタビュー調査においてもズームなどを用いたオンライン形式への切り替えなどが求められ、研究期間の延長を余儀なくされた。

## 4. 研究成果

アジアの非英語圏の大学においても近年多くのEMI プログラムが提供されつつあり、大学の国際化が進展している一方で、多くの大学が様々な課題に直面しているのが現状である。EMIが高等教育で果たす役割とはなにか、グローバル人材教育とは何か、英語とは何か、といった問いが常に突き付けられている。学生、保護者、教職員、政策立案者、企業経営者等多様な利害関係者が影響を与え合い、それぞれ国・地域の歴史を通じて経験してきた英語との向き合い方(言語イデオロギー)と照らし合わせて、それぞれの答えを模索している状況ともいえる。英語がグローバルな市場参加のために必要であるとされる一方で、その他言語の地位、および自己の言語、文化アイデンティティが脅かされる事象も観察される。

本研究を通じて、アジアの非英語圏で提供されるEMI プログラムに参加する学生はその大半が非英語母語話者であること(留学生、帰国生、インターナショナルスクール出身者、自国語母語話者等様々な入試形態、自らのemicな類型化があり、様々な英語の使用が見られるが、いわゆるKachru 類型のインナーサークルの出身者は少数派)(cf. Iino 2019, 2024, Murata and Iino 2018, Murata, Iino and Konakahara 2019)、EMI プログラムに入学するために多大なイン

ベストメントを行っていること（いわゆる shadow education と呼ばれる予備校や塾、早期英語教育、インターナショナルスクール、留学、海外旅行等）（cf. Murata and Iino 2024）、EMI プログラムがグローバル人材教育に役立っているという認識を持ちキャリア選択へ影響を持つこと（cf. Iino 2024, Murata and Iino 2024）、が確認された。また、教員についても自ら英語圏での教育を受けた非英語母語話者が大半であることが調査校で共通して見られる。参加者の社会経済的背景、インベストメントの大きさから、エリート志向プログラムとしての特徴が指摘される（cf. Murata and Iino 2024）。また、EMI プログラムは実際には多言語が教育言語として使用され、現地語を含めた他言語教育も提供されているにもかかわらず、English-only medium instruction として認識される傾向にあり、いわゆる native speakerism が強く意識される場面が多い（cf. Konakahara, Murata and Iino 2019, Iino 2020, Iino 2024）。4 年間の EMI 経験、留学経験等を経て、EMI の E が必ずしもネイティブ・スピーカーの English だけではないと認識し、英語使用に自信を持つ学生が多くなる一方、卒業時においても自らの英語に対して不安（insecurity）を強く意識する学生も見受けられる（cf. Butler and Iino 2021, 飯野 2024）。また日本人母語話者であるにもかかわらず、自らの日本語使用について、とくに学術文書の作成にあたって不安を表明する学生も見受けられる（同様の考察について、2024 佐々木テレサ、福島青史『英語ヒエラルキー』グローバル人材教育を受けた学生はなぜ不安なのか、光文社を参照）。さらに保護者の強い native speakerism が学生の留学先の選定等にも大きく影響を及ぼしている実態が見られた（cf. Iino 2024）。

日本の EMI に参加する留学生の課題としては、EMI プログラム中、授業や課題をこなしていくために英語に集中するあまり、日本語の習得がおろそかになり、いざ日本で就職活動をしようにしても企業が求める日本語のレベルに達することができず苦戦するケースが多く見られた。とくに大学院修士レベルでは 2 年間の EMI プログラムであるため、その傾向が顕著に見られるケースがあった（cf. Iino 2018, 2024）。EMI プログラムを修了した後に日本語学校に入り直し、日本語を学習しながら就職活動を行う学生もいる。つまり、入学時に日本語が求められない留學生にとっては日本の EMI は gateway として、その門戸を開き、受け入れてくれるものの、日本に継続して滞在し、就職をしようにする留學生にとっては卒業時に gatekeeper となってしまう可能性もあることが課題となっている。逆に入学時に高い英語力を求められる日本人（主に、学生間で用いられる emic な用語として純ジャパと類型される学生）にとっては、入学時には EMI プログラムは gatekeeper として機能するが、卒業時にはグローバル人材教育を受けた結果として一転 gateway と評価される傾向にある（cf. Murata and Iino 2022, Murata and Iino 2024）。

また、EMI で用いられる教材は主に英語圏の大学で使用されている教科書等が大半であり、コンテンツの共通化、画一化の傾向が強まっていることがあげられる。取り上げられる事例研究等でも英米のコンテキストの内容が多く、学生の理解を促すために教員がローカルなケースを提示するなどの努力が一層求められるとともに、英米の学術ナラティブに標準化される圧を感じるとの指摘もあった（cf. Iino 2024）。

EMI プログラム卒業生へのインタビュー（日本、タイ、シンガポールで実施）で明らかになりつつあることは、業種、職種によって求められる英語のバラエティーは多様であり、行政、金融、海運等管理部門においては英米の法律など規範が書類上求められる一方、建設、小売り、中小製造業においてはより多言語、現地語でのコミュニケーションが求められる現状である。多くのインタビュー参加者は学校英語とのギャップを経験しており、より多様な英語へ触れる機会の提供、また多様性への理解を深めることの重要性を指摘した（cf. Iino, Murata and Terauchi 2023, Murata, Iino and Ng 2023, Iino 2023）。その他、分析途中の録音データもあり、今後分析を進めるとともに、研究発表を行う予定である。

今後の研究課題として、2000 年代初頭に開始された EMI プログラムの卒業生が、卒業後 20 年を過ぎ、キャリアの中堅層となっていることから、さらに彼らのナラティブ（ライフ・ストーリー）研究、他国・地域との比較研究等を通じて、EMI という言語政策（Miyazaki and Iino 2022）が社会的にどのように評価されるのか等探求していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Iino, M.	4. 巻 8
2. 論文標題 Going Beyond EMI: Plurilingual-Multicultural Education as an LPP mechanism.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Waseda Working Papers in ELF (English as a Lingua Franca).	6. 最初と最後の頁 85-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田久美子、小中原麻友、飯野公一、豊島昇	4. 巻 33 (1)
2. 論文標題 EMI参加に伴う学生のELFへの意識変化とELF使用へのビジネスピープルの意識差の調査と英語教育への示唆	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田教育評論	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iino, M.	4. 巻 27 (1)
2. 論文標題 How Does 'Globalism' Affect Japanese English Education and Should It?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 The JASEC Bulletin	6. 最初と最後の頁 127-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村田久美子、小中原麻友、飯野公一、豊島昇	4. 巻 32
2. 論文標題 EMI（英語を媒介とする授業）とビジネス現場における『共通語としての英語』への意識調査、および英語教育への提言	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 早稲田教育評論	6. 最初と最後の頁 55-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Konakahara, Mayu, Murata, Kumiko, and Iino, Masakazu	4. 巻 6
2. 論文標題 From Academic to Business Settings: Changes of Attitudes towards and Opinions about ELF	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Waseda Working Papers in ELF	6. 最初と最後の頁 129-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計27件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 17件)

1. 発表者名 飯野公一、原隆幸、柿原武史、仲潔、小田格
2. 発表標題 これからの大学言語教育：DX、DHでの言語教育、グローバル人材教育の方向性ー現在と未来
3. 学会等名 JACET言語政策SIG特別フォーラム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Masakazu Iino, Kumiko Murata, and Hajime Terauchi
2. 発表標題 BELF users in internationally-oriented Japanese elitist companies in multilingual settings: Report on the results from Singapore and Thai data.
3. 学会等名 The 4th & 5th ELF SIG International Workshops, March 25, 2023, Waseda University (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kumiko Murata, Masakazu Iino, and Patrick Ng
2. 発表標題 BELF communication in Japan-based small local enterprises: Report on the results from Singapore data.
3. 学会等名 The 4th & 5th ELF SIG International Workshops, March 25, 2023, Waseda University (国際学会)
4. 発表年 2023年

1 . 発表者名 Kumiko Murata and Masakazu Iino
2 . 発表標題 Our gateway is your gatekeeper: different benefits and constraints EMI brings to diverse participants in ELF contexts.
3 . 学会等名 ELF 13. November 20, 2022. National Cheng Kung University, Taiwan. ( 国際学会 )
4 . 発表年 2022年

1 . 発表者名 Junko Saruhashi, Masakazu Iino, Daisuke Kimura
2 . 発表標題 A case study of language selection and language attitudes in an online nation-specific festival.
3 . 学会等名 Sociolinguistic Symposium 24. July 13, 2022. Sociolinguistic Symposium 24
4 . 発表年 2022年

1 . 発表者名 IINO, Masakazu
2 . 発表標題 The realities of ELF: multilingual communication in business settings, implications for English education.
3 . 学会等名 The 2nd ELF SIG International Workshop ( 国際学会 )
4 . 発表年 2022年

1 . 発表者名 Murata, Kumiko and Iino, Masakazu
2 . 発表標題 The same university, different policies, differing perceptions and constraints among students from two different EMI contexts in Japan.
3 . 学会等名 AILA2020(2021) ( 国際学会 )
4 . 発表年 2021年

1. 発表者名 Iino, Masakazu and Murata, Kumiko
2. 発表標題 Language policies and practices of MME (Multilingual- Medium Education) in Japanese higher education
3. 学会等名 AILA2020 (2021) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Saruhashi, Junko and Iino, Masakazu
2. 発表標題 Multimodal discourse analysis of nation-specific festivals: Focusing on cyberspaces
3. 学会等名 Sociolinguistic Symposium 23 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉野俊子、飯野公一、柿原武史
2. 発表標題 ディスカッション 「つながるための言語教育」(明石書店2021春刊行予定)
3. 学会等名 大学英語教育学会 (JACET) 言語政策研究会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Fatmawati Djafri, Masakazu Iino
2. 発表標題 The Push-Pull Factors of Study in Japan: A Narrative Study of Japanese Language Learners
3. 学会等名 the Thirteenth Conference on Applied Linguistics (CONAPLIN 13) Universitas Pendidikan Indonesia (国際学会)
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 飯野公一
2. 発表標題 ポストコロナの英語コミュニケーション－新たなアプローチの探求
3. 学会等名 日本英語コミュニケーション学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 飯野公一、田中富士美
2. 発表標題 「英語とつきあうための50の問いー英語を学ぶ・教えるために知っておきたいこと」パネルディスカッション
3. 学会等名 大学英語教育学会（JACET）言語政策研究会2019年度年次特別研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 飯野公一、バトラー後藤裕子
2. 発表標題 「大学入試における公平公正とは何か 英語民間試験導入見直しをめぐって」
3. 学会等名 大学英語教育学会（JACET）言語政策研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Butler, G. Y. and Iino
2. 発表標題 Fairness in College Entrance Exams in Japan and the Planned Use of External Tests in English.
3. 学会等名 The 6th Annual International Conference of the Asian Association for Language Assessment (AALA). (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iino, M.
2. 発表標題 Language Policy and Practice in Japanese Higher Education from an ELF (English as a lingua franca) Perspective.
3. 学会等名 LPP (Language Policy and Planning) Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iino, M.
2. 発表標題 Implementing ELF-informed language policy in Japanese higher education.
3. 学会等名 Asia TEFL 2019. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iino, M.
2. 発表標題 Going Beyond EMI: Plurilingual-Multicultural Education from an ELF Perspective.
3. 学会等名 The 8th Waseda ELF International Workshop and Symposium. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯野公一
2. 発表標題 「グローバル化」時代における外国語教育のマネジメント
3. 学会等名 第35回関東地区大学教育研究会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Murata, K., Iino, M., Konakahara, M. and Terauchi, H.
2. 発表標題 Multilingual and translanguaging communication in Asian workplace settings: roles of ELF and local languages among multilingual business people in Asia.
3. 学会等名 ELF 11. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Iino, M., Djafri, F. and Azegami, E.
2. 発表標題 Crossing borders in a paradoxical space: Sociolinguistics of “internationalization” in Japanese higher education.
3. 学会等名 Sociolinguistic Symposium 22. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯野公一
2. 発表標題 言語政策としてのEMI (English Medium Instruction)
3. 学会等名 関東地区研究フォーラム、日本英語コミュニケーション学会 (JASEC)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯野公一
2. 発表標題 「高等教育におけるEMI(English Medium Instruction) 言語政策の視点から」
3. 学会等名 JACET 言語政策分科会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1 . 発表者名 Iino, Masakazu
2 . 発表標題 How does "globalism" affect Japanese English education and should it?
3 . 学会等名 JASEC 26th Annual Convention ( 招待講演 )
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Murata, Kumiko and Iino, Masakazu
2 . 発表標題 Introducing an ELF perspective in language policy and practice: an epistemological challenge
3 . 学会等名 AILA 2017 ( 国際学会 )
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Konakahara, Mayu, Murata, Kumiko and Iino, Masakazu.
2 . 発表標題 Changing attitudes towards the use of English in business settings among young business people: a generation or/and education gap?
3 . 学会等名 ELF (English as a lingua franca) 10 ( 国際学会 )
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Fu, Bennett, Iino, Masakazu , and Miller, Allen
2 . 発表標題 Venturing into Southeast Asia: Programs and Partnerships
3 . 学会等名 NAFSA2017 ( 国際学会 )
4 . 発表年 2017年

〔図書〕 計15件

1．著者名 Masakazu Iino	4．発行年 2024年
2．出版社 Routledge	5．総ページ数 228
3．書名 Going beyond English-only medium instruction: challenges of multilingual education as an LPP mechanism (pp. 159-171) in Kumiko Murata (ed.) ELF and Applied Linguistics	

1．著者名 飯野公一、原隆幸、柿原武史、仲潔、小田格	4．発行年 2024年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 312
3．書名 付録 シンポジウム「これからの大学言語教育：DX、DHでの言語教育、グローバル人材教育の方向性－現在と未来 pp. 289-312	

1．著者名 飯野公一	4．発行年 2024年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 312
3．書名 新学習指導要領「生きる力」としての外国語：求められる競技英語からの脱却(pp. 289-308)、言語教育のマルチダイナミクス(杉野 俊子、田中 富士美、柿原 武史、野沢 恵美子編)	

1．著者名 Satoshi Miyazaki and Masakazu Iino	4．発行年 2022年
2．出版社 SAGE	5．総ページ数 1114
3．書名 Language Policy and Planning in Asia Vol. 1, 2, 3, and 4	

1. 著者名 飯野公一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 320
3. 書名 ポストコロナ時代の留学：多元化するつなぎ方、つながり方 （第17章担当 pp. 266-278）「つながる」ための言語教育：アフターコロナのことばと社会	

1. 著者名 Butler, Yuko Goto and Iino, Masakazu	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 473
3. 書名 Fairness in College Entrance Exams in Japan and the Planned Use of External Tests in English. in Lanteigne, B. Coombe, C. and Brown, J. (eds.). Challenges in Language Testing Around the World. pp. 47-56	

1. 著者名 飯野公一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 286
3. 書名 「グローバル化によって日本での英語教育はどのように変わっていくのでしょうか」（第3章 日本での英語の受容と広がり）杉野俊子監修、田中、野沢編 『英語とつきあうための50の問い』 pp. 66-71	

1. 著者名 Iino, Masakazu	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 358
3. 書名 Revisiting LPP (Language Policy and Planning) Frameworks from an ELF (English as a Lingua Franca) Perspective. in Konakahara, M. and Tsuchiya, K. (eds.) English as a Lingua Franca in Japan: Towards Multilingual Practices. pp. 47-70	

1. 著者名 飯野公一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 288
3. 書名 『英語とつきあうための50の問い』「グローバル化によって日本での英語教育はどのように変わっていくのでしょうか」 杉野俊子監修、田中富士美、野沢恵美子編著（第3章 日本での英語の受容と広がり Q13担当） pp. 66-71	

1. 著者名 Iino, M.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Palgrave Macmillan.	5. 総ページ数 358
3. 書名 Revisiting LPP (Language Policy and Planning) Frameworks from an ELF (English as a Lingua Franca). in Konakahara, M. and Tsuchiya, K. (eds.). Perspective in English as a Lingua Franca in Japan: Towards Multilingual Practices. pp. 47-70	

1. 著者名 Murata, K., Iino, M., and Konakahara, M.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge.	5. 総ページ数 279
3. 書名 Realities of EMI Practices among Multilingual Students in a Japanese University. in Jenkins, J and Mauranen, A. (eds.) Linguistic Diversity on the EMI Campus. pp. 149-171	

1. 著者名 Iino, M.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 289
3. 書名 EMI (English-medium instruction) in Japanese higher education: A paradoxical space for global and local sociolinguistic habitats. in Murata, K. (ed.). English-Medium Instruction from an English as a Lingua Franca Perspective: Exploring the higher education context. pp. 78-95	

1. 著者名 Konakahara, M., Murata, K. and Iino, M.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 289
3. 書名 'English'-medium instruction in a Japanese university: Exploring students' and lectures' voices from an ELF perspective. in Murata, K. (ed.). English-Medium Instruction from an English as a Lingua Franca Perspective: Exploring the higher education context. pp. 157-175	

1. 著者名 Murata, Kumiko and Iino, Masakazu	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 620
3. 書名 EMI in higher education: An ELF perspective. in (eds.) Jenkins, J., Baker, W., and Dewey, M. The Routledge Handbook of English as a Lingua Franca. pp. 400-412	

1. 著者名 飯野公一	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 231
3. 書名 「外国人留学生の受入れとサステイナブル社会の実現 言語政策の視点から」宮崎里司、杉野俊子（編著）『グローバル化と言語政策』明石書店 第8章担当 pp. 135-150	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------



米国	University of Pennsylvania			
タイ	Chulalongkorn University	Thammasat University		
英国	University of Southampton			
フィンランド	University of Helsinki			
Taiwan	National Taiwan University	National Chengchi University	National Cheng Kung University	